



AIRは、さまざまな場所を一時的に放送室に変化させ、発話／談話を含む「声」から場を発生させるプロジェクトです。目指すのは、非評価的環境で、プライベートと公共／共用が溶け合う場で生まれる「問いかけ」になること。

# AIR dabada

スザンヌ・レイシーに倣って  
壁の向こう側  
／階段と会談

PRODUCED BY dabada

## GUEST SPEAKER A/B/C

会期 2024年8月26日(月)

11:00-19:00

会場 Maebashi Works

〒371-0022 群馬県前橋市千代田町2-7-17



主催：dabada, Maebashi Works

態度は本当に私たちの内側にあるのだろうか？

*Is our attitude truly within us...*

メディアを通じて提案される社会の在り方、男女の均等やマイノリティの包摂を可能にするのは、そこに暮らす多数の人と言える。そもそもそれを持ちえない地方では、顔の見える世間と、均等の取りようもない限られた人数で進んでいくより他ない。例えば、この企画を主催する私たちdabadaの男女比率は3:1で、それだけで男性中心的意思決定がなされているとされるのは全くの外れである。しかしそこでの意思決定が男性中心的不是ではないと言い切れるわけではない。だからと言って、当たり前のようにトレンド化していく意思決定の場の在り方に従うために、私の男性性を排除しなければならないのだろうか？ましてや、意思決定を放棄し、他者の判断に委ねるしかないとしたら、、、そんな意思決定のない未来を、私は認めることなどできない。けれど、不均等な状況でも狂うことのない水準を、私は持っているのだろうか？

この企画を立ち上げる過程で、私はいくつもの合理的な決定をしていた。なぜこのタイミングなのか？なぜこの場所なのか？そこにあったのは優先された合理的判断、多数決が作る相互了解の最もらしさ、早い判断を促すような準備という誘導、それは意思決定そのものを支える偏った力学となりながら、話し合うことが闘うことを意味する状況を作り出していたのかもしれない。

そうだとしたら、本当に変えなければいけないのは場の均等ではなく、この意思決定の方法、つまり内面化されている男性的な力学と不必要な整合性、そして盲目的に強いている「闘う姿勢」であり、変わらなければいけないのは、その内面を持った私自身の態度なのだと思う。(dabada:川松康徳)

dabadaは今回、活動家でアーティストのスザンヌ・レイシー氏の作品を参照する。

「玄関と通りのあいだ」と題された作品は、まさに玄関と通りの間のアプローチを使って、様々な問題を話し合うものである。私(フライヴェート)と公(パブリック)が干渉するこの場所に座り、話し合われた様々な会話は、その場所では話すことができない内容だった訳ではないのではないか？それよりも、話し合う事そのものの問題があったのではないかと読み解く事はできないか。どこで行われるのか、部屋でもなく公共空間でもない場所、つまりは所属のない、帰属のない、途中の場所では、真に公共的な話など不可能な事を示唆していたのではないだろうか？私たちはこのスザンヌ・レイシー作品への推論に倣って、公共が持つバイアスを可視化させることを試みたい。



《玄関と通りのあいだ》2013年10月19日の様子

dabada

Instagram:@\_\_\_\_\_dabada

dabadaは、dada+場(ba)／ダダに場をインストールするコンセプトから、アーティスト川松康徳と山本信幸によって結成された展覧会プロジェクトとして、2010年に友人の家での展覧会からスタートしました。プロジェクトを通じて出会うアーティスト・人・場所を繋げながら、日本国内では5府県、そして韓国・スコットランド・台湾を移動し、2015年までに18回の展覧会を開催しました。2024年からメンバーを再編成し、建築デザイナーの岡田友大と、アーティストでインストーラーの内田望美を加えた4名で、アイデアをカタチにする共創プロセス／共創スプリントを行うチームとして再始動しました。